特 集

地図がつなぐ複層のランドスケープ

Maps: Exploring the Hidden Landscape Layers

ランドスケープ分野の地図の作成は，プランニング，デザイン，マネジメントにおける主題の編集であり，コミュニケーションそのものである。イアン・マクハーグが手作業で作成した大量の主題図を今改めて見ると，ディプレイ上の GIS の画像とは異なる魅力，その土地の持つ意味，可能性が目の前に広げられるような感覚を感じる。地図を介して行われるのは，複層するランドスケープのテーマへの分解と総合化との柔軟な行き来であり，それを可能とするのがランドスケープ分野の職能ではないだろうか。

現在の地図の役割を考えると，防災・減災の観点から，あるいは縮退の時代の地域の再編など，具体的な都市像，もしくは危機感を共有するツールとして，重要性が高まっているといえる。GIS の普及，国土地理院地図など閲覧・作成ツールの充実，各種空間情報のオープンデータ化により，簡単な操作で一定の品質を持った主題図を短時間で作成，総合化することが可能となっており，各分野での課題や社会のニーズに応じた地理空間情報の整備や人材育成のあり方が検討されている。また，「ブラタモリ」が人気番組となったように，まちを歩きながら，地図を介して地形や歴史を辿り地域の成り立ちを「発見」する，趣味的な地図の楽しみも一般に普及している。

一方，地図を読み解くリテラシーは大きく変わりつつある。地図はスマートフォンで眺められるもの，目的地までの道筋を示すものであり，一時社会現象になった「ポケモン GO」のように仮想世界と実空間とをつなぐ，もしくは実空間を仮想世界に置き換えるものとなっている。縮尺や図郭，記載される情報が可変的かつ個人的なものとなり，地域の全体像を目にする機会が失われているかもしれない。他方で，位置情報を持った投稿にだれもが参加できるようになったことにより，地域の今がマッピングされ，アーカイブされていくことで，これまでにない時空間的な密度と精度の地図が可能となっている。

これからの地図はどのように多層的なランドスケープを表現し，これらをつないでいくものとなるのか，本特集では，地図という空間表現の手法を介し，地域を捉え，計画すること，共有することについて，改めて議論したい。

（編集担当：片桐由希子・今西純一・土屋一彬・徳江義宏・大野暁彦・竹内智子）

特集にあたって：地図がつなぐ複層のランドスケープ

Maps: Exploring the Hidden Landscape Layers

ここ数年，地図というものが一般に取り上げられ，注目される機会が多かったように思う。「ブラタモリ」の放映が始まったのは 2008 年，地図研究家の今尾恵介氏の著作が次々に文庫化され，「東京スリバチ地形散歩」（皆川典久，2012）などの地形を読み解く本，「地図趣味。」（杉浦貴美子，2016），「地図の物語」（アン・ルーニー 2016）などの地図作り歴史と今に関する本，古地図を片手に女子高生が町を散策する「ちづかマップ」（2010-2015，衿沢世衣子）など，趣味，教養としての地図に関する本が多く出版されている。

2011 年 3 月の東日本大震災の津波災害，2014 年 8 月豪雨での広島市の土砂災害，2015 年 9 月関東・東北豪雨での河川氾濫に関する報道も，広く地形や歴史から災害リスクを把握する地図のリテラシーの必要性を伝えたものと捉えることができる。一方で，一番身近な地図がスマートフォンの Google maps となったこと，スケールや表示範囲，記載される情報が個人を中心としたものとなり，地域の全体像としてのランドスケープを自然に意識し，共有する機会が失われているのかもしれない。

ランドスケープの中に新たなレイヤーを発見し地図として描くことと，地域を計画・デザインをすることは，ランドスケープ分野の計画技術として不可分である。宮脇昭氏による「現存・潜在自然植生図」と「ふるさとのもりづくり」，イアン・マクハーグ氏の「エコロジカル・プランニング」，「自然立地的土地利用計画」（井手久登・武内和，1985），ビオトープ地図とエコロジカル・ネットワーク，カール・スタイニッツ氏が「A Framework for Geodesign」（2012）で体系化した時空間情報を用いたデザインプロセスのマネジメント，岸由二氏の提案する「流域地図」などの方法論により，多くの地図が描かれ，計画として実践されてきた。GPS や GIS の普及により，時空間的に離れていた事物，あるいは活動が重ね合わせられるようになり，新たな気づきや創造の機会も生まれている。

これからの地図はどのように多層的なランドスケープを表現し，これらをつないでいくものとなるのか。本特集では，「基本図から計画へ」，「記憶から現在，未来へ」，「記録からコミュニケーションへ」の三部構成で，地図の制作から地域の計画・デザイン，ランドスケープを地図に記録し，共有するための最新の技術や取り組みなど，「地図」に関わる研究や実務に関わる方からの 11 編の論考を編集した。

第一部の「基本図から計画へ」では，基本図としての地図の成り立ちと地形や事象の捉え方について，鎌田論文では「地形と地勢を表現している地図」としての基本図に関し，迅速測図から電子国土基本図までの変遷と今後の展開，増田論文では，環境共生都市の基盤としての地形とこれを読み解くスケールについて論じられ，笠置論文では，フィールドを記録しながら都市を読み換える手法として，地図を用いたワークショップが紹介されている。

第二部の「記憶から現在，未来へ」では，記憶の風景を地図化することで，地域の文化的な資産として継承しようとする活動として，河角・板谷・中谷らの論文では，仁和寺門前地域に住まう人々の記憶の景観に関する「記憶地図」とそのまちづくりの拠り所としての意義，渡邉論文は，多次元過去の出来事の「実相」を時を超えて伝承するための「多元的デジタルアーカイブズ」と「記憶のコミュニティー」が作り出す「オーラル・ランドスケープ」が論じられ，羽鳥論文では，「逃げ地図」が WS 形式で広がることの意義と防災教育への展開が紹介されている。

第三部の「記録からコミュニケーションへ」では，真鍋・片桐論文が，まちの地図をアーカイブすることから生じる文化的な活動と新たな地図の可能性について，平林論文では，現行のまちの緑のモニタリング・評価についてその利用対象者と利用目的が整理され，一般市民に向けたシステム普及の課題が提示されている。また小串・鎌田論文ではスマートフォンを用いた市民による生物調査の取り組みが紹介され，その継続・展開に向けた課題がまとめられている。最後の 2 編は場所に紐づいたソーシャルネットワークとして，梅村論文では，自治体横断・ユーザー参加の公園情報アプリ「PARKFUL」による公園を主役としたコミュニティー作りについて，六人部論文では，「ご近所 SNS マチマチ」について，範囲を絞ることで利用者同士の情報のマッチングの精度を高める地域限定の SNS が紹介されている。

冒頭の石川氏，今和泉氏，杉浦氏と本誌の特集担当委員による座談会，「ランドスケープの思考を拡張する地図」は，思考ツールとしての地図について，その手法や表現が与える新しい視点について幅広く議論し，全体を俯瞰する内容となっている。

本特集が，地図という空間表現の手法を介し，地域を捉え，計画すること，共有することについて，改めて議論するきっかけとなれば幸いである。

（片桐由希子）